

英米社会論

担当教員： 牧田 幸文

履修年次・区分： 3・4年（専門－展開－共生・開発）

授業のテーマ： 21世紀は超高齢社会の到来と言われる。これには医学・医療技術・衛生水準の向上からの影響が大きい。一方、19世紀からの社会変動・産業化・都市化は、個人生活パターンと家族形態を大きく変え、高齢者の生活にネガティブな影響を与えてきた。19世紀後半からのアメリカとイギリスの社会構造の変化を概観しながら、高齢者はどのように暮らし、支援を受けてきたのか歴史と福祉政策を通して理解する。

この日の授業内容： アメリカの社会福祉史からみた高齢者と支援



19世紀末ごろから、アメリカは社会科学的に社会問題を調査し、検討する時代に入ります。工場労働者の調査を行い、児童労働・長時間労働の禁止をしたのもこの時代です。年功序列制度や定年制度を導入したのは、労働者の就労を保障し、また体力の落ちた労働者を解放するためのものでした。



移民の増加によって高齢労働者の仕事が奪われたり、大恐慌での大量失業を経験したりしたアメリカの人たちは、それまでの自助による努力だけでは老後の備えが不十分であることに気がきます。20世紀前半には老齢保障・社会保障のための協会が設立されるようになりました。

(2018年1月取材)